

「新型コロナウイルス感染症と向き合い考え続けた看護」：リモート面会

高松赤十字病院 看護部

奈尾千紗都, 岡崎美津子, 貞廣香往里, 兵頭 理恵, 江崎 香奈, 西村あけみ

要 旨

当院では2020年9月にCOVID-19患者（以下コロナ患者）の入院受け入れを開始した。患者の看護を行う中で「看取り」、「面会」、「意思決定支援」について考える機会があった。今回、リモート面会という新しい面会方法を取り入れた事例を経験したので報告する。

患者は高齢男性。第4波時に家族数名と入院した。他の家族は退院していく中で、患者は改善がみられず入院を継続していた。日毎に活気がなくなり、家族に会いたいという発言が聞かれるようになり、易怒性が出現した。看護師は家族とのつながりが重要であると感じ、リモート面会を試みた。患者・家族双方に笑顔がみられ、普段無口な患者が家族の前で嬉しそうに会話する場面がみられた。当病棟では接触による感染リスクを最小限に抑える目的でタブレットが導入されており、この端末を使用してリモート面会が可能となった。リモート面会が患者と家族双方に有効なコミュニケーションの機会となることを実感した。

キーワード

COVID-19, 新型コロナウイルス, 面会, リモート面会, 看護

はじめに

当院では2020年9月よりCOVID-19患者（以下コロナ患者）の入院受け入れを開始し、2021年9月末までの1年間で、延べ500名程度のコロナ患者の看護を行ってきた。「看取り」¹⁾、「面会」²⁾、「意思決定支援」²⁾について看護師の立場で考えさせられる機会が多くあった。

新型コロナウイルスが流行し始めた頃から、当院では面会制限を行ってきた。香川県に蔓延防止等重点措置法が適応されると入館制限も行うようになった。このような状況下、面会制限はコロナ禍において仕方のないことであると病棟スタッフも捉えていたが、面会の必要性を考えさせられる事例を経験した。今回、新しい面会方法であるリモート面会を取り入れた事例を経験し、有用であったので報告する。

症 例

第4波の頃、高齢患者B氏が家族数名とともに新型コロナウイルスに罹患し、入院した。一緒

に入院した他の家族は、治療期間が明けて退院していくなかでB氏だけが症状の改善がみられず入院を継続していた。日毎にB氏は活気がなくなり、塞ぎ込んでいった。家族に会いたいという趣旨の発言が聞かれるようになり、易怒性が出現するなど精神的に不安定な場面もみられるようになった。看護師はB氏にとって家族とのつながりを感じることが非常に重要であると認識し、面会制限がある中で何か良い方法はないかと考え、リモート面会を試みた。

リモート面会の方法

当院のコロナ病棟では患者とコンタクトをとる手段としてタブレット（iPad）を活用し、全病室に備えている（図1）。リモート面会は、タブレット内のFaceTimeアプリを使用し実施している。面会日時の調整の際に事前に体調不良や発熱症状がないことを確認している。当日は家族にプライバシーの確保されたスペースに来てもらい、タブレットを貸与して看護師同席のもと短時間で患者との面会を行っている。しかし、患者の多く



図1 当病棟でのタブレットを使用した聴き取りの様子

が高齢であり、機器の取り扱いが難しい。そのため、看護師が患者の傍でお互いの顔が見えるようにタブレットの画面の向きを調整し、家族が話している内容を復唱してリモート面会がスムーズに行えるようにサポートしている（図2・図3）。

実際にリモート面会を行ってみると、患者・家族双方に笑顔がみられ、普段無口な患者が家族の前では嬉しそうに会話する場面があった。面会後には家族から「顔が見られて安心した。」との発言が聞かれた。リモート面会が患者・家族双方にとって良い影響をもたらすことを強く実感し、改めて面会の大切さを感じた。

考 察

2019年12月に中国で発生したコロナウイルス³⁾による感染症は世界中にひろがり、我が国においては2020年1月に第1例目が確認され、それ以降は患者数の増減を繰り返している。コロナ禍の収束は現在のところ全く見通しが立たず、ウィズコロナに向けて徐々に舵を切っている。

新型コロナウイルス感染症数の増加がみられ始めた頃から、当院では面会制限を行ってきた。香川県に蔓延防止等重点措置法が適応されると入館制限も行っている。新型コロナウイルス感染症は一過性の流行にとどまらない状況の中で、今後もコロナ禍がしばらく続くことを見通した対応が必要であるが、面会制限の継続は予測される。一方、全ての入院患者において顔をみて家族と会話できる環境を整えることは必要である。

当病棟ではコロナ病棟の運用に伴い、接触による感染リスクを減らす目的でタブレット（iPad）を全病室に導入し、スタッフが患者とコンタクトをとる手段として活用していた。このタブレッ



図2 当病棟でのリモート面会の様子（1）



図3 当病棟でのリモート面会の様子（2）

トを利用して今回、リモート面会が可能になった。患者は高齢であり、入院が長期になり、易怒性がみられるようになり、精神的に不安定になった。当院ではせん妄予防に積極的に取り組んでいる⁴⁾。一般病棟の患者では、認知症ケアチームに相談したり⁵⁾、院内デイケアに案内したり⁶⁾することも可能である。しかし、感染症で隔離され、病室を出ることさえままならない状況でのせん妄ハイリスク患者である。せん妄は精神障害を伴う意識障害である⁷⁾。65歳以上の入院高齢者では約半数がせん妄を生じており^{7), 8)}、決して稀な状態ではない。本例は高齢のコロナ患者であり、隔離され、監視下に身を置き、新型コロナウイルスに感染したという心理的なダメージもあり、長期入院で精神的にも弱り、せん妄予備段階であった。

看護師はこの患者にとって家族とのつながりが重要であると認識し、何か良い方法はないかと考えた。コロナ病棟においては面会できないことは仕方のないこととして当初看護師も捉えていたが、このままでは患者はせん妄を発症し、治療の継続が難しくなり、病状の悪化につながる可能性があった。また、入室時間の増加に伴い、ケアに当たる看護師の感染リスクの増加も懸念された。

そこで、病棟にあるタブレットを利用して、リモート面会を試みることにした。家族には病棟と離れたプライバシーの確保されたスペースに来てもらい、普段看護師が使うタブレットを家族に貸与し、患者との面会を行った。もちろん、看護師の同席のもとでの会話であり、プライバシー保護の観点からは問題がないわけではない。しかし、現状での最善の面会方法だと思われた。リモート面会を行ってみると、患者・家族双方が安堵の表情になり、笑顔がみられるようになった。実際に顔を合わせた面会は難しいが、リモート面会は、患者・家族双方にとって良い影響をもたらすことを強く実感し、改めて面会の大切さを感じた。

入院生活は患者の治療のために必要であるが、自宅での生活と入院生活では、環境が大きく異なり、せん妄や認知症症状を増悪させる因子となってしまう。タブレットを使用して画面越しで顔を見て家族と話せる環境が、患者の療養生活の支えとなり、精神の安寧を図ることに繋がり、また前向きに治療を進めていくためにも重要である。リモート面会後の患者と家族の反応からも、ポジティブな発言や好意的な反応がみられ、高齢患者の入院生活を継続するために効果的であったと考える。

これまで面会と言えば、実際に会って話すという固定観念があったが、今回の経験で、リモート面会でも十分な効果がみられた。面会方法について、リモート面会という選択肢が広がった。全ての入院患者にとって、顔をみて家族と会話できる環境を整えることは必要であるが、病院全体としてまだその環境は整っていない。当病棟では接触による感染リスクを最小限に抑える目的でタブレットが導入されており、この端末を使用してリモート面会が可能となった。しかし、リモート面会を病院全体で実施していくためには機器やインターネット環境、人員不足など様々な問題が考えられる。恵まれた環境の中で今回リモート面会を行うことができたと感じている。今回他の病棟に先駆けてのリモート面会を経験し、患者と家族双方にとって有効なコミュニケーションの機会となることを強く実感した。今後コロナ禍における面会方法として定着していく可能性はあると思われるため、引き続き当病棟で面会の実績を積み重ねていきたい。

おわりに

特殊な環境下に置かれた高齢コロナ患者に易怒性が出現した。タブレットを利用した家族とのリモート面会を行ったところ、患者と家族双方に安堵の表情がみられた。面会は患者の精神の安寧を図ることに繋がり、前向きに治療を進めていくためにも重要である。リモート面会は、コロナ病棟のみならず、コロナ禍での新しい面会方法として非常に有用であると考ええる。

●文献

- 1) 奈尾千紗都, 西村あけみ, 岡崎美津子, 他:「新型コロナウイルス感染症と向き合い考え続けた看護」: 看取り. 高松赤十字病院紀要 9 : 42-44, 2021.
- 2) 奈尾千紗都, 貞廣香往里, 西村あけみ, 他:「新型コロナウイルス感染症と向き合い考え続けた看護」: 意思決定支援. 高松赤十字病院紀要 9 : 48-50, 2021.
- 3) World Health Organization : Novel coronavirus (2019-nCoV) situation report-1. 21 January 2020.
- 4) 石野あさ美, 藤岡はる奈, 杵保真奈美, 他: 認知症ケアチームにおける薬剤師の役割. 高松赤十字病院紀要 8 : 41-44, 2020.
- 5) 峯 秀樹, 荒木みどり, 長嶋真祐美, 他: 急性期病院での認知症ケアチームの取り組みについて. 高松赤十字病院紀要 6 : 12-15, 2018.
- 6) 長嶋真祐美, 荒木みどり, 峯 秀樹, 他: 急性期病院での院内デイケアでの取り組みについて. 高松赤十字病院紀要 7 : 31-36, 2019.
- 7) 日本総合病院医学会せん妄指針改定班編「増補改訂 せん妄の新良指針せん妄の治療指針第2版」, 東京: 星和書店, 2015.
- 8) Inoue SK, Westendorp RGJ, Saczynski JS; Delirium in elderly people. Lancet 383 : 911-912, 2014.